宗教と日本人

揺れる聖域

▶▶4

社会的義務 教義に優先

無視できぬ「集団」の影響力

——オウム真理教事件を通して宗教が現代社会の前面に浮かび上がってきましたが。

高村さん　小説を書き始めるころ、編集者からまず、題材として宗教はダメ、教団の具体的な名前を出してはいけない、といわれましたよ。作家にとって宗教はタブーで、そうなのかなあ、と変に思いましたけどね。

——ごく普通の日本人は宗教のことをまともに考えてこなかったようですね。

高村さん　宗教と政治については、考えてこなかった、というよりも、黙認してきたのです。選挙の際、宗教団体の人たちが一軒々々を回っていたのを見てきたし、ひょっとしたら、それが宗教的行為を逸脱していたのではないか、とも思っていた。政党と教団との関係も、新進党にしろ自民党にしろ票田にしている、と国民も気づいていた。これまでタブーだったことが、いよいよまな板に乗ったということでしょう。

——高村さんはカトリックだそうですが、宗教はどのようなものだと……。

高村さん　私は、修道院付属の幼稚園に入り、高校、大学もミッション系でしたから、神を切り離して物事を考えることはできません。しかし、私自身にとって、神は個人的なもので、それ以上のものでもありません。キリスト教やイスラム教なども、もともとは荒野で生まれ、信仰は神と私の一対一の契約に基づくもので、私は教団という集団には入れない人間です。

——しかし、信仰を求め、ほかの人とともに生きていこうとするのも宗教です。

高村さん　だけど、集団になると、そのほかの人には排他的になり、外部に向かって同化を求め、政治化していきます。たとえば、京都駅ビルの高さをめぐって京都の仏教会が反対しましたが、住民一人ではなにもできませんし、宗教団体の持つ政治的な側面に目を向ける時代になってきたのです。大規模な教団では信者の活動は政治化し、信仰の自由と社会的義務という相いれない問題が出てきました。

——個人にも信仰か市民としての責任か、という問いがあります。

高村さん　教団としては、個人に対し教義に従うよう求めます。自分たちは輸血をしない、とか、カトリックの場合は避妊はだめだというように。しかし、避妊が必要な場合があります。教義か日本の社会通念によって生きるのか、そのどちらをとるかといわれた時、私は日本の法律に従うというだけです。日本という国家の中で生きているという前提を考えたとき、宗教が先か国家が先か、と問い掛けられれば、私は国民の義務を優先します。オウムのように人を殺すことを認めるものは宗教ではありません。

——今回の宗教法人法の改正については。

高村さん　宗教法人を治外法権にするのはまずい。教団は現実にお金を持っているし、宗教法人とはいえ、経済法則に従ってお金を銀行に預け、運用を図っていくわけですから、情報公開をすべきでしょう。宗教の浄財とはいえお寺の修理に使ったとか、寄付の内容を公開するのに何の問題があるのでしょうか。

——宗教に対する「国家の介入を招く」という反対意見がありますが。

高村さん　私には、そういう根拠が分からない。信教の自由について国家は介入しない、とはっきりと憲法で守られています。大きな集団になれば、社会への影響も無視できません。近代社会の政治的システムが数の論理を打ち出すとき、教団の力、指導者の思惑が政治家に影響を及ぼし、今後、教団の社会的存在が大きく問題化していくでしょう。閉鎖的になりがちな教団に対して外部の人間が情報公開を要求する権利はあり、同じ社会を構成する人間として当然のことです。今回の改正論議を契機に、きちんと論じていってほしい。

（聞き手、大阪学芸部・池田知隆）

＝つづく

高村　薫さん

1953年大阪市生まれ。国際基督教大学卒。貿易会社勤務を経て作家に。「マークスの山」で直木賞受賞。昨年夏刊行された「照柿」は、現代の「罪と罰」と高い評価を得た。現在、「サンデー毎日」で「レディ・ジョーカー」を連載中。